

第4回『森の広場』市民観察会  
**観察ガイドブック**



(カンタン)

**2007.9.9**

主催： 森の広場市民観察会実行委員会（青森市内8団体参加構成）

共催： 新城縁故者委員会

後援： 青森市、東奥日報社、NHK青森放送局

主催8団体：「青森の自然環境を考える会」「ウォッチング青森」「青森・草と木の会」「樹木医会」  
「青森野鳥の会」「森林インストラクター会」「青森自然誌懇話会」「やぶなべ会」（順不同）

# 秋・森の広場 によろこそ!

## 「草陰で鳴く虫・草花」観察会

### ■「第4回森の広場市民観察会」次第

1. 受付	09:30～
2. オリエンテーション	10:00～
3. 野外観察会	10:30～
4. 解散予定	12:00

### ■ 注意事項

- ・ 鳥や小動物を驚かさないう、静かに行動しましょう。
- ・ 環境保護上、必要以上の採集や踏みつけなどは慎みましょう。
- ・ 虫さされやウルシかぶれなどの危険性が有ります。また、濡れた路面で滑って怪我をする場合も有ります。自然の中では常に何らかの危険性が伴いますので、ご自覚の上行動には充分ご注意下さい。

### 「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全林整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズバショウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同

## 動物 - 1



カラスヘビ(シマヘビ黒化型) (ヘビ亜科)

俗に「カラスヘビ」は人を追いかけてくる恐ろしいヘビだ、などと言われられています。しかし、本当は無毒でおとなしい「シマヘビ」が黒化しただけのヘビで、人を襲うなどと言うことは絶対にありません。変な噂が言い伝えられていたため、画像の個体は気の毒にも撲殺されてしまいました。普段はカエルやネズミを食べています。



ヤマカガシ (ユウダ亜科)

以前はおとなしい無毒のヘビと言われていましたが、現在は**危険な有毒ヘビ**と認識されています。奥歯の根元で毒には血液凝固作用あり、血栓ができて臓器の機能を失わせて死に至ると考えられています。これとは別に首にも毒液を飛ばす毒腺があり、防御用に使われます。こちらは捕食したヒキガエルの毒の借用と考えられています。



ニホンザリガニ (アメリカザリガニ科)

以前は北海道、青森県、秋田県北部だけに棲んでいた日本在来の「ザリガニ」ですが、開発が行われ急速に生息地が消滅して、現在では絶滅危惧Ⅱ類のランクされている貴重な動物です。「森の広場」でも2007年春、残存・棲息しているのが確認されました。かつては青森市郊外の沢目には普通に分布していました。



モリアオガエル(卵塊) (アオガエル科)

水面上に張り出した樹木の枝に泡状の卵塊を生み付けことで有名ですが、「森の広場」でも観察できます。観察できる時期は6月10日頃から20日頃が適期です。近似種に「シュレーゲルアオガエル」がいます。両種が混在する地域もあります。「シュレーゲルアオガエル」は、泡状の卵塊を水辺の草の間に隠すように産卵します。

## 動物 - 2



アオモリマイマイ (オナジマイマイ科)

東北地方北部に分布しているポピュラーな右巻きのカタツムリです。「森の広場」でも遊歩道を歩いていると見かけることがあります。マイマイの仲間は雌雄同体ですが、それぞれの個体は性熟時期が異なり、交接によって遺伝子情報が交換される仕組みになっています。小画像は5月の観察会に撮影された交接中の画像です。



トリノフンダマシ・オオトリノフンダマシ  
(コガネグモ科)

「クモ」と聞いただけで嫌悪感を持たれる方も多いでしょうが、いろいろ色も形も習性も異なります。その中でも「トリノフンダマシ」類は面白い色形のクモだと思います。また、秋になりますと産卵するのですが、卵囊を見守っているのか？卵囊が見つかった近くの葉裏には鳥の糞の様な親グモが潜んでいます。



ヒメジャノメ (ジャノメチョウ科)

「森の広場」には他に「クロヒカゲ」「ヒメウラナミジャノメ」「ヤマキマダラヒカゲ」など数種類のジャノメチョウ科のチョウが飛んでいます。そのうちの1種が「ヒメジャノメ」です。林の周りなどをヒラヒラ飛んでいて翅を閉じて止まれば縦の黄白色の線が見えます。幼虫はチジミザサヤススキの葉を食べます。



ルリシジミ (シジミチョウ科)

小型の瑠璃色に光るシジミチョウです。とくに春に現れるオスは綺麗で、平地でも普通に見られるチョウです。画像は夏に出るメスで黒い縁取りが多くなります。飛び方は活発で色々な花に止まる他、湿った地面に降りていることもあります。春から秋まで見られるチョウです。幼虫はマメ科の植物を食べて蛹で越冬します。



## 動物 - 3



ゴイシシジミ (シジミチョウ科)

オスメス共に黒褐色の小さいチョウなので止まって翅を開いていれば気がつきません。しかし、ササの葉に止まって翅を閉じれば鮮やかなゴイシ模様が現れます。ササ藪の上を飛び回っています。今年は発生数が多いようです。幼虫は肉食性で、ササの葉裏に付くアブラムシを食べて幼虫のまま冬越して春にササの葉裏で蛹になります。



マメコガネ (コガネムシ科)

日本在来の小型のコガネムシですが、北アメリカでは日本から移入されて大害虫「ジャパニーズ・ビートル」と言われて恐れられています。日本でも各種の植物を食害し、時には画像の様に大集団を形成しています。幼虫はいわゆる「ネキリムシ」ですが各種植物の根を食べて幼虫のまま土の中で越冬します。



ゲンジボタル (ホタル科)

最近各地で行われる「ホタル祭り」は主として「ゲンジボタル」の発生時期に合わせて行われています。「ゲンジボタル」は青森県が北限になっています。「森の広場」でも幼虫の餌になる「カワニナ」の棲息が確認されていました。7月7日夜、「森の広場」に来てみますと棲息を確認出来ました。



エゾゼミ (セミ科)

大型のセミで鳴き声はギーと連続した音で「森の広場」では良く鳴いています。エゾゼミの仲間では生息域が最も低く、郊外の里山地帯に普通です。近似種の「アカエゾゼミ」と混生している場合もあるそうです。翅は透明ですが暗褐色の斑紋がジグザグ模様になっています。「アカエゾゼミ」では2個です。

## 動物 - 4



オニヤンマ (オニヤンマ科)

日本最大のトンボで日中林に囲まれた林道上を低空で巡回する習性があります。「森の広場」でもごく普通に見られます。また、止まる場合は道端の草などにぶら下がって止まります。繁殖場所は湧水のある細流で、林道脇の側溝の様な場所でも毛深く頭の角張ったヤゴの棲息が見られます。



アオイトトンボ (アオイトトンボ科)

イトトンボの仲間では大きい方で緑色金属光沢のトンボです。繁殖期以外は草むらで生活していますので遊歩道周辺でも草に翅を開いて止まっている(他のイトトンボ科では翅を閉じて止まる)のが見られます。アオイトトンボは性熟すると白い粉が出ますが近似種のオオアオイトトンボは粉が出ません。



マユタテアカネ (トンボ科アカネ属)

オスは性熟すると腹部が鮮やかな赤になります。画像は未成熟のメスですが性熟しても赤くなりません。また、メスの一部はノシメトンボの様に翅の先端が黒くなるものもあります。マユタテアカネはアキアカネよりはやや小型です。観察路の中では黄色の未成熟アキアカネ、マユタテアカネメス、赤くなったマユタテアカネオスなどが混在して見られるでしょう。



タンボオカメコオロギ (コオロギ科)

大型のエンマコオロギに次いでポピュラーな黒いコオロギです。草むらの中で「リリリリッ…」あるいは「リ、リ、リ…」と断続した音で鳴いています。コオロギ類の鳴き方はオスのソロとメスが近くにいるラブ・ソング、気温の影響、喧嘩の鳴き声など同一種でも変化があります。

## 動物-5 / 植物-1



### ヤブキリ (キリギリス科)

体は緑色で、樹上性の大型のキリギリスです。幼虫時代はヨモギなどのてっぺんにいますが、成虫になるに従い樹上に移動します。生息場所や鳴き方などでいろいろ亜種に分けられています。肉食性が強く他の昆虫を襲ったり、時にはカエルまで襲うことがあると言われています。「ツシー、ツシー、…」と断続的に鳴きます。



### ハラアカハバチ

現在「森の広場」のカラマツは、「ハラアカハバチ」と言うハバチの1種の食害によって赤く変色しています。写真は、大発生による食害状況です。食葉性害虫の大発生で樹が丸坊主になっても、その食害が直接の原因になって枯死することはありません。天敵類の活動などで大発生が自然に終焉するのを見守っています。



### エゾイチゴ (バラ科)

葉の裏が白いので「ウラジロエゾイチゴ」、あるいは「カラフトイチゴ」、また「ユケウマリ」(アイヌ語で鹿の苺の意)とも言われている北海道ではポピュラーな「木苺」の仲間です。本州では比較的希な分布をしているそうです。「森の広場」では新たに確認された苺です。熟した実は甘くて美味しい？



### エゾツリバナ (ニシキギ科)

花は5~6月に咲き長い柄の先に花を付けるので名前の由来になっています。花はそれほど目立ちませんが、果実は秋に割れて中から真っ赤な種子が見えます。秋には美しく紅葉するので鑑賞は秋の方が良さそうです。(写真は果実)

## 植 物 - 2



ハマナス (バラ科)

本来は海岸の砂浜に自生する植物ですが、「青森市の花」に指定されていることから「森の広場」建設に当たって植栽されたものと思われます。一重のバラに似た大きな花が咲きます。実は赤く美しいのでお盆の頃墓前に供えられたりします。熟した実は甘酸っぱくビタミンCが豊富だと言われています。(写真は果実)



クズ (マメ科)

花はフジの花を逆さにしたように花穂を上方に伸ばして濃い赤紫の花を付けます。ところが繁茂した大きな葉が邪魔してよく見えないのが残念です。根茎から採取・生成した「本くず粉」(吉野葛、越前葛、伊勢葛、若狭葛など)は生産量が少なく非常に高価です。以前は新城でも生産されていたそうです。



ガマズミ (スイカズラ科)

春は散房花序に白い小さい花を咲かせますが、秋には赤い実を付けます。完熟して白い粉を吹くような状態になった実は甘酸っぱく美味しいそうです。赤い実は果実酒の原料にされ、滋養強壮、利尿作用もあるとか、色はロゼ・ワインのような美しい果実酒になるようです。紅葉シーズン、林縁で美しい赤い実が見られます。



オオウバユリ (ユリ科)

夏に太い花穂を伸ばしてテッポウユリに似た花を咲かせます。時には花の数が20個近いこともありやや湿った林縁などで豪快に咲いています。秋には花の跡に緑色卵形の実を付けます。頑丈な実や種子を飛ばした後の殻も残りますので花材に使われることもあります。



## 植 物 - 3



クサレダマ (サクラソウ科)

名前の由来は「腐れ玉」ではなく、「草連玉」ですので誤解なされないように。湿地に群生しています。「森の広場」では8月に調整池の北岸湿地で見られます。草丈は150cmほどにもなり、鮮やかな黄色の花を付けます。葉は2~4枚が輪生しています。



ノコンギク (キク科)

野山に普通で薄紫の可憐な花を咲かせています。「ヨメナ」に似ていますが、冠毛の長さや全体に毛が多いなどで区別できるそうです。「森の広場」では数も多く、観察路沿いに秋を通じて咲いています。



エゾフユノハナワラビ (ハナヤスリ科)

シダ植物の1種です。秋になれば胞子の入った穂を伸ばします。穂にはたくさんの球状の胞子葉があって9月頃熟します。冬に栄養葉(常緑)が伸び夏に胞子葉がまるで花穂のように直立します。春、栄養葉が緑色で雪に押しつぶされたような状態で見つかります。草丈はさは30~40cmに達します。



ミソハギ (ミソハギ科)

水辺に咲く紫紅色の夏の花です。水田の水路周辺で旧盆の頃咲くので仏前にも供えられるので盆花とも呼ばれています。「森の広場」では調整池の岸辺で見られます。よく似たエゾミソハギとの区別点は、茎や葉の毛の有無、葉の付け根が茎を包むかどうかで区別します。

## 植 物 - 4



ツリフネソウ・キツリフネ (ツリフネソウ科)

湿った半日陰の場所に生える1年生草本です。「ツリフネソウ」に比較して花の付具合は少なく花の咲く頃には葉の下につり下がった状態になりますので葉の下から覗くようにしないと写真も撮れません。「ツリフネソウ」の方は葉の上に赤紫色の花を比較的多く咲かせますので遠くからもその存在が分かります。



ヤマハギ (マメ科)

各地に普通で、秋の七草にも数えられるマメ科の花です。枝の先に小さい花序を着けて紅紫色の蝶形花が2~3個咲いています。草丈は2m近くにまで伸びて株状になっています。



ミゾソバ (タデ科)

名前のように道路脇の溝などに群生しています。葉の形から「ウシノヒタイ」と呼ばれることもあります。花卉の先端が淡い紅色が普通ですが、殆ど白色のものもあります。タデ科の花は花卉に見える部分は萼で花卉はありません。やっかいな雑草扱いですが飢饉の時に食用にしたので「ソバ」の名が付いたそうです。



アキノノゲシ (キク科)

日本全土の山野~荒れ地に生え、60cm~2mになります。花は淡黄色で円錐花序に上向きで咲きます。葉は互生して細長く逆向きの羽状に分裂しています。近似種(最近多く見られるようになった?)に細長い葉が分裂しないホソバアキノノゲシがあります。葉や茎に傷が付くと白い乳液がでます。

## 植 物 - 5



オオハンゴンソウ (キク科)

明治時代に園芸植物として導入されたものが野生化した帰化植物です。舌状花の花弁が長いのでヒマワリを小型にした様に見えます。時には大群落をつくるので厄介者として処分もされています。舌状花が長いのでの花弁が垂れ下がるのも特徴です。特定外来植物にも指定されています。



アカソ (イラクサ科)

林縁や谷筋のやや湿った場所に生え、茎と葉柄が赤く葉には3脈があり先端部分が大きく3裂しています。秋には細長い尾状の花序が伸びて毛が生えたような小さな花が並んで付きます。茎を乾燥させて表皮を砕き取ると繊維が採れ、縄文人はこれらの繊維を使って衣類を制作したと考えられています。



ヌルデ (ウルシ科)

「ヤマウルシ」に似た形態なので誤解されやすいのですが、種子は長期間休眠し、伐採跡地など地表が攪乱されるといち早く生える先駆植物の1種です。葉は奇数羽状複葉ですが葉軸に翼があるので「ヤマウルシ」などとは区別できます。樹液を塗り物に利用出来ませんが毒性は弱く普通の人では「漆かぶれ」は起こらないそうです。



アオモリアザミ (キク科)

葉は深い切れ込みがあり、それぞれの先端に針を生じます。春の根生葉はやや光沢があるので他のアザミ類と区別しやすいです。秋には茎の先に紅紫色の頭状花を付けますが、舌状花のない管状花のみで構成されています。花からは雄薬や雌薬が棒状に突き出し、これも針山のような景色となります。

森の広場観察路略図 (『森の広場』で観察した事柄を略図も利用して記録しましょう。)



ガイドブック制作: 自然を見つめる やぶなべ会 (2007.9.9)